

将来の日本および国際社会に 貢献する人間を育成する



学校法人聖学院
理事長

清水 正之 氏

建学の精神とSDGsとのつながり

聖学院は、1903年に前進の聖学院神学校が創立されてから、まもなく120周年を迎えようとしています。長い歴史を通じて発展し、現在は幼稚園から、小学校、中学・高校の男子校と女子校、大学、大学院まで、9つの学校と総合研究所を擁しています。聖学院の建学の精神（スクールモットー）は「神を仰ぎ 人に仕う」であり、個々の教育の場面で「誰一人取り残さない」を実践しています。SDGsは、キリスト教的な理念を現実に落とし込む際に、具体的な形で目指すべき姿を示していると考えています。

生徒の成長を促すSDGsの取組み

SDGsの代表的な取組みの一つに、中学・高校の生徒有志が参加し、パラスポーツの魅力を世界に届ける「男子校×女子校プロジェクト」があります。この活動の1st STAGEでは、車椅子バスケットの選手や視覚障害のある柔道選手をお招きし、生徒と一緒にパラスポーツの体験をしたり、選手への取材を行い、「パラスポーツの魅力を伝える動画」を制作しました。

日常生活において、健常者の生徒が障がい者の方々と触れあう機会は多くはありません。生徒たちは、最初は少し可哀そう、辛そうと思っていました。ですが、障がい者の方々との交流を通じて、彼らの中に明るさと積極性がとてもあり、むしろ可哀そうと決めつけていた自分たちが心の中に障がいを持っていたと気づきました。生徒たちはこれを「心のバリア」と言っています。また、普段は別々に



男子校×女子校プロジェクト

学んでいる男子と女子が協力したことで、性別についても固定観念を持っていたことに気づいたよう

です。当活動を通じて、生徒たちは教科書では学べないことを多く学ぶことができました。現在はプロジェクトの3rd STAGEに入り、メンバー一人一人が実現したいプロジェクトを立て、一から計画を練り、実現をめざすプログラムを行っています。

別の取組みとしては、男子校、中学・高校はタイ北部チェンライにある孤児施設に訪問し、ボランティア活動を行う研修を30年前から実施しています。施設の大半の子どもたちは、親と一緒に生活ができず、中には親の顔も知らない子どももいます。彼らはタイの山岳少数民族であったり、ミャンマーやラオスからタイ北部に入ってきた人たちです。彼らを誰かが保護をしないと、売られてしまったり、工場で働かされたりします。

2018年はこの研修に40人が参加しました。施設の子どもたちと約10日間生活を共にし、厳しい環境の中でも屈託のない子どもたちの笑顔に接したことで、生徒たちは、本当の豊かさや自分に与えられている役割について、真剣に考えるようになりました。

聖学院ではこの他にも、大学の地域と連携したボランティア活動や、大学をはじめ男子、女子、中学・高校での震災ボランティア、男子校、中学の農村体験学習など様々な活動に取り組んできました。こうした体験は、進路選択や社会を見据える姿勢に大きな影響を与えています。

充実した中間層の構築に向けて

今の社会は中間層が壊れつつあり、分断が起きています。格差社会が広がることは、人類にとって危険なことです。SDGsを通じて、いかに意味をもった持続的な社会をつくるのが課題であり、その中で教育が社会のありようを決めていくことは確かです。理論や知識ではなく、人のため、社会のためになることが身体化されていく必要があります。そのことが、将来の日本や国際社会のあり方に大きくかわるでしょう。理解力のある、対話力ある人間を育てることで、充実した中間層の構築に取り組んでまいりたいと思います。